

バークリと神の「アナロギア」

荻 間 寅 男

一般に哲学史の常識によれば、ロック、ヒュームと並び、バークリはイギリス古典経験論の一翼を担うとされる。すなわち、観念論に対して、経験論を掲げた三人の哲学者とみるものである。しかし、この常識は今世紀初頭に改められ、バークリは観念論者として、カントに先駆する者であるという説が主張された。さらに、初期の稿本の発見や全集版の刊行により、この説も再度修正され、今日ではバークリ哲学は、観念論ではなく、物質から脱却して最高度の認識の実現をはかろうとする非物質論を主軸とした観念論的形而上学を意図したものであり⁽¹⁾、キリスト教信仰の擁護をはかることを一大目的とするものであると理解されている。

しかしながら、目を転ずれば、十六世紀以来のイギリスの宗教改革は、「エリザベスの宗教解決」を与えられ、国教会はフッカーのいわゆる「中道主義」を教義の中心としている。「中道主義」を合言葉としたイギリス国教会が主教制度と祭儀主義に依拠し、思想、実践の両面において論点を絞ることのない徹底しないものであったことは、多くの指摘するところである(8: 71, 17: 39)。しかし、他方、国教会のよって立つ祭儀主義は、教理については反教条主義を打ち出しそれを通じて、急進的な意見の主張を避ける穏健ないし批判的な学的態度を育成した(9: 196ff.)。この素地のうえに、自然探究を神の存在の証明の手掛かりとする Boyle たちにみられる合理的な信仰の擁護が普及する。しかし、やがて第一原因としてのみ神の存在を認め、自然の自律を主張する立場が支持されるにいたったことも、また多くの指摘するところである。通常理神論と称される17世紀後半から18世紀初頭におけるイギリスの思想には、うえのような護教的なものから無神論的なものまでの広がりがある。しかも、イギリスの宗教改革は信仰にかんする議論を忘却することにより完成する。名誉革命体制はこのように曖昧な国教会制度を固定し、そのうちに複数の宗派の存在を認めるという矛盾を定着させる⁽²⁾。

さて、このような思想的歴史的背景のもとで、バークリがキリスト教信仰の擁護を目指し論駁を展開したのであれば、一体そもそも何を意図し、何者を対象として批判し、また一体そのいかなる主張を取り上げていたのであろうか？ 哲学上の主著である『人知原理論』

(1710) と宗教批判を主目的とする『アルシフロン』(1732) にみられる神の「アナログア」についての議論を手掛かりにバークリの意図を解明したい。

注

- (1) 大槻春彦『人知原理論』解説(文献1)。
- (2) 国教会制度のその後の歴史に及ぼした影響については、松浦高嶺『イギリス現代史』(山川出版社、1992) 19-24頁。また、文献16, 17。

(一)

バークリの哲学的思索の中心的動機がキリスト教信仰の擁護にあったことは明白である。『人知原理論』(以下『原理論』と略)には「諸学の過誤および難点の主要原因ならびに懷疑論・無神論・無宗教の根拠を探究する」と副題が付けられ、その真意を読者が誤ることはない。我々の知覚は「造物主」の意志に依存しており、

「まことに造物主こそ、その力ある言葉をもって万物を保ちながら、もろもろの精神のあいだの交わりを維持したもう唯一の御方であり、これによってもろもろの精神は相互の存在を知覚できるのである。」#147

知覚の正しい理解は、我々をあらしめている精神の存在という真理を心に知らしめる。

「これ以上に明白なもののありえないことは……私たちの心に親しく現存して、私たちが絶えず感触する一切の多様な観念ないし感覚を私たちの心に産む精神、私たちが絶対かつ完璧に依存する精神、一言で言えば、そのうちに我々が生き、動き、また存在する精神、そうした精神の存在なのである。」#149

バークリの「存在するとは知覚されることである」(『原理論』#2f) という命題は、決して感覚論的経験論ではなく、非物質論の表明である。それは「事物が心の外に、ないしは知覚されずに、存在することを主張する」物質論者に反駁し(#19)、観念は「心すなわち精神的実体によって支持される」(#89) 無力な存在であり、我々がもつ観念のすべては神の記号であるという「そのうちに我々が生き、動き、また存在する精神」の存在を説明する見解の一端でしかない。

「私たちの見たり聞いたり触れたりするすべてのもの、いや、感官がなんらかの仕方でも知覚するすべてのもの、それらは神の力能の記号ないし結果であり、人間の産む運動そのものについての私たちの知覚[さえ]も同じく神の力能の記号ないし結果なのである。」

#148

このように正しく人知の本性を理解することによって、我々は過誤や難点から自由となる。

しかしながら、バークリにとって強力な論敵が立ち上がる。すなわち、当代の著しく進歩した自然探究が提起する懐疑論・無神論である。一方では、自然探究は神の御業をよく知るためという護教論を動機とするものと、他方エピクロス説に与し、無神論を広めようとする者の間で激しい論争が戦わされていたとされるが、バークリに直接先行する17世紀末葉のイギリスの思想界において論議の焦点になったのは、精緻な宇宙の体系とその第一原因である「神の一撃」(4: pt.3, p.37) を説くニュートン自然学である。バークリによれば、ニュートン自然学はつきるところ、「真実の空間は神である」もしくは「或る永遠な・創造されたものでない・無限不可分不易な事物が神の他にある」(『原理論』#117) という極めて「危険な両刀論法」に陥ると主張する。前者によれば、神は「感覚中枢」(12: 疑問28) のような器官を必要とする不完全な存在であり、後者は当然神以外を究極の原因とする無神論であり、いずれも首肯できるものではない。

当代の科学的新知識は、宇宙全体の整然斉一的な構成また働きを証明する。すなわち、科学的新知識は、そのような秩序作用は、宇宙を支配する精神の「仁慈と知恵」ないしは「デザイン」を我々に「類比」(#108) により納得させると説くことをバークリは指摘する。

「こうした整然たる斉一的な働きは、[宇宙を] しろしめす精神の、すなわち、その意志によって自然法が組成されるあの [宇宙を] しろしめす精神の、仁慈と知恵とを極めて明白に現示する。」 #32

さらに、

「一体、私たちが理知の光明に随うとき、私たちの感覚の恒常斉一な次序から推し測るところは、これらの感覚を私たちの心に喚起する精神の仁慈と知恵とであろう。」 #72

バークリのニュートン自然学への関心は、非常に早い時期に始まったものであるが、他方ニュートンがバークリの批判を知ったか判然としない。ともかく、ニュートンは自己の初期の思想に回帰したと考えられるが、自己の説明が神を第一原因としてのみ捕らえる理神論を弁護していると誤解を招くと正当にも察知して、ニュートンは『プリンキピア』第二版(1713)の一般的注解において、神を「万物の主として、ありとあらゆる事物を統治する」、他方では「常に、そしていたるところに存在することによって、持続と空間とを構成する」(11: 562) ものである。端的には「神の働きの枠組みが時間と空間である」(18: 193) と再規定して己の見地を確実にし、実質上感官また精神と別個に存在する時間・空間を否定する

バークリ (#98, 111) と同一の見解を提示するにいたる。これにとどまらず、1715年のライプニッツとの論争において、ニュートンは、時計職人が精密に時計を組み立てた後、長い間をへて調整補助する「神自身が事物の根源的力すなわち動く力の製作者、連続的保存者」(2: 14)であることを認める。これは、バークリの

「もし神にして、創造のさい賢明な目的のため御自身で確立し保持したもうた機械作用の諸規則に一致する働きをなそうとお思いになれば、記の〔文字盤上の〕運動が産み出されるのに先行して、時計製作者が器械を作って正しく調整する動作のあることが、必要である。また同様に、文字盤上の運動になにかの故障があるとき、これに伴って器械にも対応的な故障が知覚され、この故障がひとたび直されれば、すべては再び正しくなる、ということも必要なのである。」#62

という見地と同一で、再度ニュートンはバークリ説に伍するのである。

このように、一方において、バークリは『人知原理論』において示す自然学に依拠する懐疑論ないし無神論に対して批判し、他方同時代人に支持を得つつあった精密な自然学の欠陥を指摘する。すなわち、

「〔自然学者は、〕自然の業のうちに類比や調和や一致を発見して、個々の結果を解明する、すなわち一般規則に還元する。」#105

「自然の一般規則から論じる場合にも、類比を遠くにまで及ぼし過ぎてそのため間違いに陥ることがありえなくはない。」#108

この類比ないし「デザイン」による神の存在証明の「最上の鍵」が、ニュートンの力学論文とされる (#110)⁽¹⁾。自然の一般規則から唯一の存在を導出することはできない。一般規則に基づく類比は、「自然の造り主が齊一的に作用する」(#108) という仮定に依存し、この仮定は「私たちの明白に知ることができないところ (#107) であり、人知を絶することであるということである (cf. Three Dialogues, Works, II. 254)。

バークリの言わんとするところは、自然学者の営為は、決して無為とはいえないが、しかし、本来の狙いを見失っているということである。

「自然学者の職分たるべきものは、自然の造り主が制定したこれらの記号を探索して理解しようとする力めることであって、形体的原因によってもって事物を解明しようとするのではない。この形体的原因を云々する理説こそ、人々の心をあの能動的原理すなわち我々がそのうちに生き、動き、また存在するあの至高で賢明な精神から私たちの心を余りに遠く離隔させてしまったように思えるのである。」#66

これに対し、パークリは、認識論的証明とも云われる

「自然の業と呼ばれる事物は、すなわち私たちが知覚する大部分の観念ないし感覚は、人間の意志によって産み出されない、換言すれば人間の意志に依存しない。これは、すべての人に明白である。それゆえ、こうした観念ないし感覚を引き起こす或る他の精神がある。」 #146

を掲げ、神の存在の証明とする。また、パークリは特異な現象の意味も考慮する。

「なるほどある場合には、自然の造り主は、事物の通常の序列から外れた現象を産み、よってもって造り主の超法則的力能を現示する……この自然のもろもろの業たるや、その出来栄えにおいて極めて大きな調和と工夫とを知らせて、造り主の知恵と慈恵とを極めて平易に指教するのである。」 #63

奇蹟とは、「造り主の超法則的力能の現示」に外ならない。

そうであるならば、「特殊な現象が一般規則から生ずる模様を一々正確に明示することを街うのは、心の品位を汚す」のであり、そうでなく、

「私たちは、志をたてて、一層高貴なことをもくろみるべきである。それは、次のようなことである。自然のいろいろな事物の美や秩序や拡がりを多様を展望して心を養いかつ高め、また、これから正当に推論してよってもって造物主の莊嚴と知恵と慈恵とに関する私たちの思念を拡大し、そして最後に、被造世界のさまざまな部分がもともと定められた目的に役立つよう、すなわち神の栄光と私たち自身ならびに同じ被造物仲間の維持と愉悦とに役立つよう、私たちのできるかぎりを尽くすこと、それらのことである。」

#109

結局「デザイン」による神の存在証明は、「至高で賢明な精神」ないし「能動的原理」である神を、我々人間の「品位」の汚れた心でもって推断することであり、断固として承服しがたいものである。パークリの意図は、精緻な自然学を通じて神的存在を証明しようとした、いわゆる合理主義神学またはニュートン主義神学の弱点を的確に把握し、攻撃するものであり、だけでなく、皮相な護教論をも排するものであった。

注

(1) 研究史上このパークリの主題の十全な取り扱いには存しない。一般的な接近として、文献9, 13, 15

があるが、これらはみなパークリが自然の合目的性を認め、したがって神の「デザイン」による証明を肯じるとする。

(二)

1720年代末葉にアメリカ植民地に学校を建てる計画を推進実行する過程において著された『アルシフロン』は、対話の体裁を取るため、論者の主張が不鮮明になる嫌いがあるが、パークリが意図した目的は、主にアルシフロンなる人物が表明する当代の自由思想に対するパークリを代弁するユーフレナによる論難である。「自由思想家を無神論者、無道德家、熱狂家、嘲笑家、批判家、形而上家、宿命論者、そして懐疑論者に照らして考慮する」意図であり、必ずしも「個々の自由思想家に作中人物が一致しない」(Advertisement)が、十八世紀初頭の著名な自由思想家であるコリンズ、マンデヴィル、またシャフツベリの教説が主に検討される(6: 11)。自由思想家と目されたこれら思想家がはたして理神論者として、パークリの批判の適切な対象であるかは大いに議論の余地がある。むしろ理神論者の多数は、真摯な信仰家であると自ら反論したのである。そのなかでも、当代最著名の「神の存在を否定する論証を発見したと公言」したとされる反宗教家すなわちコリンズが7対話中3編で取り上げられる。

さて、コリンズは第1対話において、宗教が多種多様であることはその虚偽と欺瞞を証明するとして取り上げられる。しかし、実はここでパークリが反駁を加えるべきことは既にスウィフトやベントリという当代の練達した論争家により取り上げられている。傑出した古典学者であるベントリは「多数の読み方が存在することは原典自体を疑わしいものにするのでは絶対はない」(5: 56)と断言し、コリンズの学識、批評能力の欠如を立証する。他方、スウィフトは、既に『キリスト教廃止論を駁す』を発表し、キリスト教を廃止すれば、従来宗教に向けられていた才人たちの攻撃が政府に向けられ、「真に憂慮すべき事態」が生じるから、真のキリスト教の復活でなく、名目上のキリスト教の維持を図るべきだと揶揄していた(14: 245)。そこで、スウィフトにとって、コリンズの主張などは嘲笑の対象にもならないものであった。スウィフトはパークリにとって同郷の先輩でありいわば庇護者でもあったが、なぜパークリが敢えてコリンズを取り上げたのか判然としないが、全対話の一般的な導入部として言及されたとも考えられる。

これに対して、第4対話において、コリンズはアナログアすなわち類比による推理を攻撃する重要な役を果たす。パークリは、アルシフロンに立場を変え、論敵にたいし、神の存在の証明を求めさせる。そこで、護教家ユーフレナによって宇宙全体の複雑精妙な仕組みは

「デザイン」の証明ではないかといわれる。しかし、それは既にみたようにパークリにおいて不十分な証明である (Dia. 4, #5 cf. Pr. #107)。そこで、「万物のなかに神を見る」という一種の形而上学への疑問がアルシフロンにより呈示される。これに対してクリトがいわゆる認識論的証明を示す。

「この視覚言語が知識、知恵、そして仁慈と必然的結合をもつことは明白である。それは、力能と摂理との直接の働きを指示する恒常的創造に等しいものである。」 (Dia. 4, #14)

これは既にみた『原理論』における、

「神の保存がなければ全宇宙体制は存立できないという説であり、そして、この神による保存とは、学院の人々の説明によれば、連続的創造なのである。」 #46

神の「デザイン」による証明では不十分であり、神の「保存」があって全宇宙は存立する。他の精神によって我々の知覚は成り立つというパークリの哲学の主張の展開である。『アルシフロン』の核心部である第4対話は実は『原理論』の中心的教説を再説しているのである。さて、アルシフロンは、他の精神を推論する根拠は、物体の知覚によるのであり、言語のそれではないと異議を唱えるが、ユーフレナは、

「運動法則、偶然、運命、もしくは同様の不可視な原理によっても全く説明も解明も不能で、常に折があれば変位し、それに似合ったように常に変位している、無数の目的の組み合わせに結合、解消、転項、変容、適合されたごく多数の記号の即時の生産さらに再生産は、ある精神もしくは思考存在の直接の作用を表白し証言する。……

この視覚言語は、単なる造り主でなく、先見ある、現実態に直接に存在し、私たちの利害と関心に注意深い統治者を証明する……」 (Dia. 4, #14)

として、視覚言語もしくは記号の体系がそれを「監督し、支配し、統治」する精神の存在を十分に証明すると答える。これは、再び『原理論』に拠り、「神的視覚言語」の説を示すことである。

「一体、諸現象から一般規則を形成して、そののちこの規則から現象を引き出す人々は、原因を考察するというよりむしろ記号を考察するように思える。ところで人間は、自然の記号における [一般的な] 類比を知らずとも、換言すれば、いかなる規則によって或る事物はしかじかなのであるかを言えなくとも、自然の記号を良く理解できるであろう。」 #108

「自然の記号」すなわち「我々の知覚するものは神の力能の記号ないし結果」(#66)なのであり、我々は、そのような記号を読み取らなければならない。要するに、バークリは、「自然の造り主が制定したこれらの記号を探索して理解しようと力める」というように、我々が神の存在を確信する方策を呈示しようとしているのであり、決してその存在を証明しているのではない。神はそれらを我々に与える、創造し、統治する存在であり、「そのうちに我々が生き、動き、また存在する精神」(Dia. 4, #5, 6および前述128頁)という説明は決して証明ではない。

第4対話の後半において、バークリも旧知の当代のダブリンの有力な2人の神学者の間の論争に触れる。すなわちブラウンとキングとの間の類比とは何かという論争を自由思想家がつけいったとして、語られる(6: 2-3, 13: chap. 9)。論争は、ブラウンの要約するところで、キングは隠喩でしかない類比と類比的推理の根拠である類比を混同しているとされる。バークリは、さらに類比が本来ギリシアにおいて数学的にただ割合ないし比率の相似を意味したことを指摘し、学院においてもこの用法は初めは守られが、やがてあらゆる関係に用いられ、さらに転じ、関係の相似にまで拡大適用されるようになったことも示す。自身も学院の用法に従い、知恵とか仁慈という人間の言葉は、神または無限者の知恵に「比率」的であること、すなわち神の知恵は無限であるが、有限な人間の知恵は「比率」して有限であるとされる。しかしながら、バークリの説明には、微妙な混乱が含まれていることに注意しなければならない。バークリによれば、

「「知」は、言葉の本来の正式な意味で、神に比率的に帰属せしめられる。すなわち、無限な神の本性に應ずる比率を保持することである。それゆえ、私たちは、神が人に無限に超越するものであるから、神の「知」は、人の知を無限に超越するものであるといえよう。」(Dia. 4, #21)

われわれが神を人間の類比によって知り得るかという設問は古来からのもので、アキナスの推断、すなわち、「神における「知」は、習態ではなく、純粹現実態である」と、「完全には正確には神のうちにある」こと、また「被造物に固有である仕方は、造り主と適合しない」(Dia.4, #19, cf.3: pt.1, q.14, a.1., pt.1, q.13., a.3.)をバークリは引き、アキナスに自身倣うかに思わせる。確かに、ジルソンが指摘するように、アキナスのアナログアについての説は、

「根本において、われわれの神についての認識に神の被造物からの無限の隔たりがあることを明白にしようとする配慮以外のものではないのであって、したがってかれはこの

隔たりに橋渡しをするような概念をわれわれに対して認容することを否定する。」(7: 235-6)

という見地を明らかにする。「比率」としてあまりに隔絶するのであるから、「関係」ないし信仰としてのみアナロギアは成立するのである。すなわち、端的には、無限な存在について有限な存在が類比によって知悉することはないから、アキナスのアナロギアはただ「関係」ないし信仰でしかない。一旦これをパークリも受け入れたかにみえる。しかし、カエタヌスは、それを有限な存在にある属性は、完全である神に属するとした。そこで、パークリはカエタヌスの修正に従い有限な存在に見いだされる「あらゆる種類の完全は神のうちにある」とし、われわれはそれを分有するとみる。あくまで「比率」としてのアナロギアに固執する。

「私たちは、既に前提されたことと矛盾することなく、私たちが有限な精神のうちに想い抱くことができるあらゆる種類の完全は、神のうちに、しかも被造物のうちに見いだされるなんらかの不純物なしに、存すると断言しうる。」(Dia.4, #21)

しかし、そもそも「アナロギア」とは、無限な神の知識と不完全で有限な被造物の知識との隔絶を説明するものであり、「比率」を考慮することは実は無益である。それはさきにみた『原理論』における「志をたてて、一層高いことをもくろみること」(#109)と矛盾する。神の知は人知と、隔絶するからこそである。神の知をわれわれが付度することは不可能であり、不遜でさえある。大いなる精神のうちに「生き、動き、存在する」という確信以外になにが人に必要であろうか。

結局、混乱であっても、それを矛盾と呼ぶのはパークリにあまりに多くを望み過ぎているというべきであろう。第7対話は前半においてコリンズの天恵・自由意志という宗教の神秘を示唆する言葉は無意味であるという批判にこたえ、後半では、近年の宗教批判が真摯な議論を用いていない批判して結びにする(文献16)。

ここで注目すべきは、クリトの、

「正邪にかかわらず、宗教はなにかの形で存続し、神ないし被造物へのなにかのかたちの信仰が残ろう」(Dia.7, #21)

という発言である。パークリはすでにあまりに多くの不毛な宗教論議を目にしていた。アイルランドの僻地の寒村クロインの主教に就任するのはアメリカから帰国してのことであるが、もともと見聞の広いパークリが、さらに既に身近のスウィフトらの経験を通じ不毛な狂

信と懐疑は十二分に知悉していたと了解すべきである。アイルランドの窮状打破の提言を掲げる『問う人』が公刊されるのはクロイン着任後であるが、むしろかなり以前に執筆の構想は始められていたとみるべきである。また後のタール水という万能薬の発明も同様に以前のアメリカ経験に由来するといわれるように、バークリの注意は常に現実的な知的探究に向けられて来た。むしろ、そうであるからこそ、デオニシウス・アレオパギテ以来の教説を念入りに検討してきたのであろう。いいかえれば、『アルシフロン』において、バークリはただ言葉の示すように「諸学の過誤および難点」や「懐疑論等の根拠」を考究しただけではなく、17世紀末から18世紀初頭のイギリス社会に現存する精神を遠くアメリカから展望して考量したと理解しなければならない。

(三)

『アルシフロン』が、バークリの本来の哲学と疎遠で、流行する自由思想を攻撃する通俗的な著述であるという批評は、古くから根つよく存する。例えば、全集版の編者であるジェサップはそう主張する。しかし、その核心である第4対話はその批評が、まったく事実無根のものであることを示す。むしろ、周到に概念の意味を歴史的に確認しながら、自己の哲学的立場を提示している。このようなバークリの取り扱いは、むしろ真摯であり、『アルシフロン』において、自己の哲学をより一般的に展開することを意図していたことを思わせる。道徳を取り扱う予定の『原理論』第2部の原稿が失われ、バークリの悪についての考え方は全く不明であるため、神のデザインにおいて人間の行いがいかに位置づけられているか我々には理解できない。しかし、『アルシフロン』第4対話における類比についての考察は、バークリのこの問題にたいする解決を既に示していると考えらる。すなわち、知恵も仁慈もそれぞれの大きさに「比率」的であるのである。しかし、それにまして、我々はそれを知らしめる大いなる精神の内に「生き、動き、また存在する」というアナログアすなわち「関係」ないし信仰のうちにあると思うしかないのである。

文献

(引用の初の数字は下記文献表の番号、後ろの数字はそのページを示す。)

1. Berkeley, G. *The Works*. ed. A.A. Luce and T.E. Jessop (Edinburgh, 1948-57).
なお、A Treatise concerning the Principles of Human Knowledgeの訳文は『人知原理論』(大槻春彦訳) 岩波文庫に従った。また、Alciphronは拙訳。
2. Alexander, H.G. ed. *The Leibniz-Clarke Correspondence* (Manchester, 1956)
3. Aquinas, Thomas, *Summa Theologica*. なお『神学大全』(高田三郎訳) (創文社) I, IIを参照した。
4. Bentley, R. *A Confutation of Athenism from the Origin and Frame of the World* (London, 1693)
5. — (Phileleutherus Lipsiensis), *Romarks* (London, 1728)

6. Berman, D. ed. *Alciphron*, with an introduction, (London, 1993).
7. Gilson, E. and P. Böhner *Der HL. Augustinus und Der HL. Thomas von Aquin* (Paderborn, 1954) 『アウグスティヌスとトマス・アクィナス』 (服部・藤本共訳) (みすず書房, 1981)
8. Henry, J. "The Scientific Revolution in England", Roy Porter and M. Teich ed., *The Scientific Revolution in National Context* (Cambridge, 1992)
9. Kline, A. David, "Berkeley's Divine Language Argument", in 6 above.
10. McGrath, A.E. *Christian Theology* (Oxford, 1995).
11. Newton, I. *Mathematical Principles of Natural Philosophy* (『自然哲学の数学的諸原理』 (河辺六男訳) 世界の名著)
12. — *Opticks* (『光学』 (島尾永康訳) 岩波文庫)
13. Olscamp, P.J. *The Moral Philosophy of George Berkeley* (The Hague, 1970)
14. Swift, J. *An Argument against Abolishing Christianity in England* (London, 1711) 「キリスト教廃止論を駁す」 『スウィフト政治・宗教論集』 (中野好之・海保真夫訳) 所収 (法政大学出版局, 1989)
15. 一ノ瀬正樹 「『視覚新論』 とバークリ哲学——神・身体・同一性——」 バークリ 『視覚新論』 (下条・植村・一ノ瀬共訳) (勁草書房, 1990)
16. 塚田理 「ピューリタニズムから理性の時代へ」 『イギリスの宗教』 塚田理編 (聖公会出版, 1980)
17. 八代崇 『イギリス宗教改革史研究』 (創文社, 1979)
18. 吉仲正和 『ニュートン力学の誕生』 (サイエンス社, 1982)

(小論の要旨は1995年6月24日法政哲学会において発表された。諸先生の貴重なご教示に感謝を申し上げます。)